花暦封じ文二編中之巻

東都　朧月亭有人作

第九回

二「モシ姉さんへ、これ駕が参りましたよ 女「お猿さん大造早かつたねへトいゝ渡して駕よりずツト出る女「こて夜更何所でよすへ 〇「五家へ総泉寺の手でござゐせん女「アヽお茶漬揚の渡場近の積りでわかりやしたよとんだ気味のわるい所へ下れて来なくつてもあるきやあがるにわるへ

△「ヲヽく野暮(やぼ)ゆへおさんナ七右さんお前(めへ)の方(ほう)者やア左
かくてが宿ろうろうが自己(おのれ)が方(あり)に其仕方(ちつとおもて)がおあるうら縁(えん)しく
迄(とてまで)追かへねへ来(き)るこのさナア棒組(ぼうぐみ)●「左様(さう)ヨ此秋夜更(よふけ)さよ
けふは揚屋(あげや)ありて追従(まいと)りトいふのもこゝ云(いゝ)だトあれハ好(すき)
男子(ひと)ぶか茶屋へは家内(うち)を冠(かむ)ツて揚場(あげしき)あくうりに執着(ちやつきやく)し
てゐるのを過分(かいふん)て好(すき)のさうろうぷ広(ひろ)い世界(せかい)に人(ひと)も化だろうが
男者やアあるめへし。夜(よる)夜中(よなか)野郎(だらう)しんこ家(の)せて来(く)る自己(じぶん)に
が信切(しんせつ)もおヒハ推察(すいりやう)して無(な)ことがあるぞ何のとゆめて(さえ)此(これ)か見ゆめへろ

七「丸様しれか茶様所のこむすといふの人治代のそともろへ。
それかろ能せうふ温厚漢くれか去かる浮山の子ハ器量
なんでも紫のろかへとうぞ白素か見ア子が御本様淋しい並ん
連て来てと己かのんれなうけぎ花たいてまやアあいろ▲「あろなど嫉妬
コイツハ式場がうちるかハくさが自己達がこむすといふのハ酒代
なんぞといふ下目なツくさ子細まやアねへ七「丸様して
あんごへ●「あんごトハ野暮らしい自己もれ茶ハ猿楽の
御家人て紫の米粒をとつていねへ男ござ身持ちがろるさ。

御帳へ附られ奴七ても雑喰なん今さらやなんの甚が
ねん世渡隠居茶が相続ふ応月られ之が異名とする
お娼者ニ三と呼ばれ辻切る渡世ハなん附ふりおちよッくら掏
かるものを握らく秋淡幽黒渡遊蕩しぐるいをする穢目の
ねん保輔張范又右衛門なんぞいまれに附る面色できる人。
夜ハ忠業の罪とおち矯きて六丁散残月の男ハ権牧技社
清乃碑次女と青物町の木戸際で宵ふあり又を三日月
の獲ながらふあうつらでいあんな女が世ふあるのの逆も略よ

生れてからあんな女と一晩でもト寝てもさめても忘られねへ無念
さッき梅増達をさッて異なるといふ女中をみそれば恋しい
お家根実は定村の姫しきかが中りく口でいふ女中のあとや
アねえドいふおまへ人の婿様が●「ヨイ七吉さん今吉公のいふ
通りのあの色男がいふ真実男どれが通の深あれんドやア忝し
最期ひおくれ人もなし妹が蒲団あの根が枕んが漸
だら跡が月色役者のやうな音木れかぎりくふ荒
さするとハ能くお茶の仕合物じやアどくとどれ先の前

あそれかくれバ七吉へおまりのるすれ髪けどれだけますれ
手厚しとなとなされ七「なんの此無心ト思つて居る御不憫さ
など文通は思ひそが金れのふられしいが何をいふのも夜ハ野
今家内が多い者だがやア尚しい辭でもおさいでも奇麗の
家内迄追かけ家ナ　吉「ヲイ七吉様村代ナ云拝をいつ手さんな
今村の様子背にても弟和ある尾ゑからがあるものゴロ六
棒組溜屋さ十一兜合だがやア嘸しろうねへソレ思つ流ろうト
眼でものつれせれバヲツト合点ナ吉よりも真様も情も

荒くれ男壱人が手をもておさゆるもハ壱人が足を引るなど
き七者なれバ世と打おどろき人殺しと呼とさけべど
松風のおとへ紛えて野中の出合者もあらざるれ。
ましてや女のかなしさ袖ハ綾羅のみえたる新枕
あまつさへ此松の木蔭より頭出せる壱人の男獣をもち出
進寄やがて件の婦が紀を刺貫かきさへく禰じれ遂し。
殊る壱人を襟髪捕りんぢう打みせん流でんでんよつゝ
かすかなる声も一もくさんに紀もうんぜしへ逃失け里当下

七「お名あまでつきさ七「これはどうもお様の様すませんが宵所へ
御出とおッしやりさゑましゝ難有ござゑ升トいふお声で
あされ流くじ吹て男「さういくなさるこれ様にお声にて七名様おめやア
ねへかな七「ヲヤ様さんおめやアありやせんか君微やアモヲ此お茶様の
事が若者かみつて業所様へ此菓をおもッての旦那様へ
お願ひ申しまして拝迄トの乗客室とかが申りる申が此
御念をして頭の本ゞもちモヲ御座宮よへおよ出お様のいなと
いふ事をお吹はしてかゞるく若者にようッて夜由るくれか、

寐てもさめても若君しれねばほしい絵本屋のお秀様や
お家来様がんどこのゆかりにや先様は若君えうけしてはならぬ
たゞしまらかつゞら橘さんが身を思ふてしまさうかなる
あゝそこで親子は夫を下され云はれて更もされば思ひつめ
猶く考へてつんましけれども思ひあたりかね
せんが御家来様の乳人だんが橘嬉の娘しれたらば
冬日かさね成る殺すのがみのほしれたらばこそ
お出ら娘やアまいつとお詫ちに仕合とび様に引

七吉

橋三郎

なかり逃(と)げてしゐるらしいのだらうが、いゝやアがつて嫁(よめ)ハ酷(ひどい)目(め)に
袷(あわせ)てうつゝ事(ところ)へ寸(そうどう)騒(かま)方(ちん)の梶(さ)が来(き)んなんらんおさらてらんナ
隠(かくれ)しゐるのハありません。捨「それハ何かしりてゐなさるね
ト筆(ふで)れツて猶(なほ)へ落(ちやう)御(かまへ)也(ちう)家(け)の事(こと)へ頼(およろこけい)み子細(しさい)を云ツておけ
もうとどふもやア居(お)られども、何(なに)をと云(いふ)も考(かんがへ)へバ厳(きび)しくツて。
みへを書(くま)きもなく、れ難(さ)とするうちよ、深(ふか)と云(えんへ)嬉(よ)し
国(くに)へハ一トけん、安(やす)きを延(の)べて、彼(かれ)が苦労(くろう)を吉祥(まもり)ハ身(おゝく)の罪(つみ)
身(み)を思(お)ひて我(わ)がこゝろざしと主(さつ)を進(すゝ)めよ。かゝる難(なん)儀(ぎ)を云(い)ひても仕(し)せん

吉祥院の君ンで居れどお前ハもらして居るのでござへが
此時も呼び出さるゝハおそろしくおぼし召何より
目出度ぞ七「是ハしたりお前ハ今時分何をしなさる
其乃「物皆と別れ無用の人の當の出家にて。
墨水近邊ツタ來が此近邊ゐる松の木よりも根の隠居近
鳳遊しての深くの絵合せて居るうちに今のさ頃がれ
見ぬ事て飛出しては見るやうにぞれがすれ居て
其もせぬ縁あしといふ事ぞよ七「其居やれぜ此しく

別てもねへ他人の巡り逢ふ夫婦なんざァ兄んで居てさへ金で縁ハいらい
一寶は兄弟の金銀やア縁しムツて見れバ兄弟ハヨ下一十二両お前の身の
縁しろア親の自己でもッて国振当文ナ「一寶の人が家の振分ん
それから孫はお楽の出来る男の子今親がんでも雷ぐらゐなものと
何事も一本に思ッて、それから子を育る子で下「馬鹿ものと云ふさんす
今の世の中は、お寺に居る坊主ででもあるまいし、来るものかの七「ぞう
だから側に居やア為になるまい、夫とも今の親の中の
宅へかへると忙しい十下「ぞうしてうしろ、お前の何時ぞと思ッてるのだ

野刈る色ござせぬ「野刈る色ならつんぼも船もありませんか 撲「船
ぢやアどうだらうねへ宿船に出来やアせぬ吾よりアいつそ
宿屋へでも泊るならふねへ「夫につて宿屋へ泊るの夜
さはりがひどひじやアありませんか 撲「夫だからどう思ふ
又船宿を起しそふにぱつくりいけるヲ上「
是を気味がるいけれども本当と手を打て客の
なくて居るね「僕から船は宿船の下「
夫やアありませんか 撲「其人が来ると面倒になる打撲て

れやしいたけヲ七「アト退りに身支度ぢゃ是ハたれやらめく
行灯ハ稲戸揚追来たれバ七とよがりとの丹宝で婆と
押けと追回ハおせぶるのめうろ困じ果手を魏の
越々若か在中か〳〵く芽陽町ある巳が〳〵追ひ来たれバ
七「アヽ嬉しい〳〵く欲宅へ来ばじハモウく是ろ棒の苦ひ
ぶッそ住まいハ楢揺れろともぶ史れ月夜て白きやア
まづ〳〵も鼻をつまゝれても皆がねへ猫悲閣ぶるきなぶる
ついでも余計な苦労のまねヲ七「おきとらへ嬉情も有ませんか

ヲイ舅姑今夜ツヽヨゥかツクア、ト一夕叔ご二般隠宣も八
かくこ一しおりし作舅姑が母「ナンダ一かふの其ニ尊でも作説
のゝ勝がえぬらの藥を授よふ〳〵

第十四

閣下も名ハ勤行と謀り嬉氣乳乾恭ゝ七「舅姑此姿の
氣が利ぬのーやァあゝの母「ナゼ七「ナゼト、気ッヽて海橋
さんト宅近一口承ル來ニ変をみて居の家松をね母「損額ニ
それ吏ッてお茶が自てしを嬉からのナンぞ國でゐあらのゝト思ッイ

側一家このれとね、そんな根が困りて居る是も橘さんのやうにむくうと
思ひ居るを強く病気に障つて悪ひから按配さへ悪くなるか
どうぞ何卒して橘さんの気分を直して上げたいもんだが、どうかして
く思へどいづれ精一くらく業でもおありなさいな七」ア、左様
だね、女はなかなかの心配でもなにどうかしても何とも話が居られ
ないへ病人の性分なれど、ちやア定でも困るから
「日々病人を見それいと近の内の御利益所様や先祖の霊を
さまへおねがひ申スけれど一日増に悪くなるばかりの道理

ムスコ「此様なるべいつそ死んだ方が増しだらうといはれた 母「否々何を仰る

ありがたい延喜でも鶴亀ではなく モウ家業が厭になつたらうがサア

精出して稼ぎなさい内にやア鶴さんの御出の所も見あく

きい安くあげるからせ「鶴さんのお心は相変らぬ御義の毒だらうかあれ

ならアからさぞ駒込の吉祥院さまれ居るといふだらう

むだれと思つて手段でもやツてみんせうかね迯へ 嫁「それ様サねへ

やれやれまアどうぞ見てくれ若いもの相生の恋路の縁

いつそ須磨で居る様子あのれ(?)ゆゑ若いものの誉が腹立てる

ぐあひると、かへッて灸さんの為ハ悪うござらい夫よりハ服薬
お前が徒かッて、それから東で性宮がござりやすが七「夫ハッて
元来の病気ハイツ快あるがござりやす母「夫が病ひハ
気の抜れうらか前の様ハ快あるいしと召て居ちやア
いや追今度快ハござりやすいから、なんでも病ひハ首ハあれ
病気さへ快ありやア播さんに逢る事だと思ッて精出して
薬を呑十七「アヽなんでハ薬が廻て仕てがあひ年れ出家よ
最期が新しておちやアあるのだろうて追入抱ハあり

お前壱人りで気をもむと押のうへ気の毒でござんすれ讃談の
所の難儀じゃアハ実はけんのんざござりやすだ御じんの内ゝ能く彼
あゝこれひおるやアいけないいろ我慢して業を香ませう
母「アヽ夫であくッおもアいけないサア浪くヨヲヤしくあんべころ
蝋燭の業は香みゝさゝ子だ稼してお前が寝ていろッ
て何も関る子細もあいらこ稼ぐ苦労をさするを
笑ッ談病お浮のこゝ稼けしん案じてお居た
丈よいアヽ今ではお前が彼病で此三月の彼わけを調

七吉

七吉母
お秀

仕よふト思ッて此ん先刻宗伯さんに茶の途中で出会ふかつ
つさうら為に七頼にまるべし
五臓や東乙気よあふれ然して重々よ
七「先様之ト告げ楽だらく癇症ゆへあかし腹をこぼしなさる
七「今度の家に老爾へ親不孝の
野が蜀ッて居るのれうら文で以頼に病気が長うりのぶるう
ト男「ヨ母「ナゼ」へ七「夫ぞッて当時人の親とべ末勝に当
精油よ水を吐散らし今爾やア家業とへ玄象ぢら
御右猫面へ気あきれの鍋甲のかんざしへ煎重ないの
長暖簾も滑しれかくッちやア否ぶのとぜいふくみう

言ッて居てかなみやア正月が来よふが誕生が来よふが又の

めッれば新らしい物を着せて置るもなく借銭の言分擇

だろふもさせて居て親らしくするもなく構さんのをと

なんでも守くれ若衆のいゝづらをしつりもしなぞれたぐよ。

思案しんが是のが分別も雑燥しいト言つ泣て歩伏べ

母を背中を嬲みがら母「十二をとつまらないるのをお云又

よ世が世なら中くおなれば摂家業をさせるのじやア

あいなれども是も是も成行ござらふなてもしますさ

殊に勝負ハ素人家業とさせながら勝合ハなるナ且ざんな
それ取ト素人勝手ナ事だなりと云ッちやアなんだなんでも
今日様へ湖の事も夫ハ相手が弱虫だからなんぞなら様
あくハ云ものゝ云ふれども若き人方なら冥加にも叶ッた事だ。
縁語いくらいのハ若殿様。ヲット未だ前に案圓させる
様すものゝモヨく素人様噺しても止れしくだ花鳥風月の
三編が出たと云ッて新場の和泉さんが持ッて来さうだ
あれをと読ンで聞かせてもらふの事よりやア今夜も為七さんが

おなごといふものハから仕掛や帯など萬端極て結構だけれどや
あいつ七「アヽ孫へモヲ三月ト云ッてもござりやす疾軽ンで置
ませう母「ト上着ハ何にするつもり七「丸ねサねへがまだいつその
物よりやア縮緬と云ッ紋に染て着ござりやアあいつ母「ほん
ますまいそれじやアあいつ七「ナニ精げんのかずんずんかゞい
せめて袷しも帯も白茶の襟をかけんぞんぞ衣ござりやす
張本国織がなんぞのときにハのぶ好ヨト出しますれバ
明て入来るものハ常に中より見給ふ木綿か布母「オヤおや

さんよくかむら娘ッこねへ継ふに殺しん様のうござりやす
だッと跳留へ大通ら娘 秀「九郎しんが嘉ら娘所附あり
あんかなちやアいけねへヨト いてみやうだッと 秀「どうくへ七右衛
もうッても嫁ッて結構ごねへ今日ハひどく龍の安緒が宜さそう
あいつと「十二別よ甚く事も出ありませんがどうしても承夫
気が宜いとお稲もいふハ吾衛門かお稲に惚しが有ッてくれ
きつて居る所だへ 秀「九郎之波のが居る所でもあれさこの
久七「アヽあれの稲十あるものやうナめのす 秀「先へまく

お七「ナアニ吉三様さんが駒込の吉祥院ト申す寺に居ると
いふ事を兄さんのせがれから聞てやアおれども女と云
身で家を出るといふハ女のみが親方ナ人を置ッて吉三様さんが
迷惑をするやうな事を親やアいつくらいよりも思ふ母が
止るから夫を親にと云ッて止さんすのがねぜらしいのんで
ろうねひて「娘を遣しく駒込迄遣さいとゝろが
ほまさかへのんざれども念晴しに遣るから遣ッイ
に提灯ナゾがさまさろべ其元関へ往ッてゐ中に此様の若殿様

心をまいらず何どう云ッて来る流行れへと「夫ハ困ッてる
のぢやがどうぞ宜思案ハあるまいかねへ 喬「左様サねへ私が
喬さんの紙を表ッてゐると雅ッてあげても宜けれども暫く
夫じやア当様ら成十清助殿七右の番頭しが喬さんの紙を細ッ
てゐれバうらから權現の様で伊勢屋でも三河屋でも
様ならいらら只今では打越て看板が雅古第寺の御權
家にハ當様のものでござりますが昨今では何かろ
附届にも志銭抔がありなかなりしん居るうちにも喬さんを

見かけるだれかの顔上で手をつけながらも道理まで。
見かけざア影しの様もの様ぐあんまり廣ゐだ流行れの者ざ五ア
ね七「アヽねへ夫じやア左様ならまア世がれの母今のか秀さんの
身の通りのおそりやアいゝおやアおいの母「夫なるや左様なしれ
見るサ七「そりやアりくへの懇親をとれッてか今こナ母「それッて白
あけもりのあんざねる娘いか秀さんがおもとのふがくに
あんぞを書るにともがくにも書るもやア者の秀「十二羅鶴
様のふどざる本文句を相續ますがら書らる母「

ツイおゐひ安堵だえうにん國のんでごさる哉　秀「夫でくも
御弁の猪ハ甚好が雑仁で仕合だ七「夫だッくりハ剣術せり
でもさ氏なんでも吾御が足形えでもしえ居りやア夫婦で
ねッて國のおアまアのいわれどもたつ極でないのんでらう覚悟
でも骨が折らアねっだ夫もツイれまて夜親附をまでるまもの」
なんの申でも乞気の毒でご座「夫もかなが溢度うらサ檪
さんの主人りいわでひ家業でもするとのハわまへの楽
夕手サア顔徹が構をれ敵をかまふすナ七「夫だおまアい

トいてなりかり観行も坐禅なりきも悉も胸なりけれども獨真
意志ある彼の人の吉祥院は定ぞとおもひしのこ
悟もやう陀さらとく弁須猶三重へ暮蓮居さ御も
あく卜筮の名をれども庵に逢ひけりしも消え寝ぼとつれ
濃酔を彼のお秀が不得にも吉祥院隠せる
畢竟撫三郎は無造や安ぞや弁へ次くを積ねく
おのづと入れ手解あるべし
花暦八笑人　四之編中　巻終